

保育者養成校におけるコロナ禍での保育実習・実習指導の在り方 についての一考察

音田 忠男・八田 清果・真砂 雄一・奥 恵

A Consideration on the Ideal Way of Childcare Training and Training Guidance in the COVID-19 Infection Disaster at a Childcare Worker Training School

ONDA Tadao, HATTA Sayaka, MASAGO Yuichi, OKU Megumi

キーワード：保育者養成、実習指導

はじめに

本学は幼児保育学科単科の短期大学であり、学生の大多数が保育者を狙っている。毎年、筆者らは本学の実習指導のあり方について検討を行っている。しかし、昨年度は、世界的に流行し猛威を振るっていた新型コロナウイルス感染症の影響によって、学内の授業の在り方が対面授業ではなくオンライン授業に変更された。そして教員と学生、学生同士の距離を一定に保ち、かつマスクをつけたままの授業を行うなど授業の在り方も大幅に変わった。

保育実習指導の授業もまた例外ではなく、保育実習（保育所、施設実習とも）やその実習指導のスケジュールや授業の在り方が大きく変わった。例年のスケジュールの通り、保育実習（保育所・施設）を行うことが出来ず、5月に予定していた施設での観察実習は中止という形をとり、2日間の施設体験を含む学内実習に切り替えざるを得なかった。2日間の施設体験は、学生が一斉に体験することは不可能であるため、施設体験の時期も体験を行う施設自体も様々であり、五月雨式での施設体験をせざるを得ない状況となった。

また、実習指導に関しても、5月の緊急事態宣言を受け、通常授業からオンライン授業に切り替

わった。緊急事態宣言が解除され、対面での通常授業を開始したあとも学生同士距離をとる、いわゆる三密を避けながらの授業をよぎなくされ、通常であれば力を入れたいグループワークなどについても思うようにできない状況が続いた。学生だけでなく教員も実習指導や実習に不安を抱きながら進めざるを得ない状況であった。

1. 研究の目的

昨年度、本学ではこのような例年とは全く違った特殊な状況の下での保育実習、実習指導となった訳だが、こうした状況下の中で、学生たちはどのようなことを感じ実習や実習指導に臨んだのか。また実習中はどのようなことを経験したのか、コロナ禍以前の实習と比べ気持ちの変化はあるのかなど、コロナ禍における保育実習や実習指導の在り方を振り返るとともに今後の知見とすることを目的とする。

2. 研究の方法

2020年度、保育実習（保育所・施設）を行った本学の2年生を対象にアンケート調査を行った。実習前、実習中、実習後の各項目から学生自身が行った対策、コロナ禍において保育所や施設がどのような対策を行って保育や療育、仕事をしてい

たのか、4月から保育者になるうえで不安なことや心配なことなどを明らかにすることで、コロナ禍での実習指導や実習において、本学の学生自身がどのようなことを考え、どう感じているのか集計し、コロナ禍での実習の在り方を検討する。

(1) 対象

対象は2020年度の本学の保育実習Ⅱ・Ⅲ（保育所での責任実習・施設での責任実習）を行った2年生（66名）である。そのうち、アンケート調査回答数は58名（保育所で責任実習を行ったもの35名。施設で責任実習を行ったもの23名）であった。

実施時期はそれぞれ責任実習を終えたあと、本学での保育実習指導の授業内で行った（2020年12月）。1年生に関しては、保育実習Ⅰ（保育所での観察実習）が2月に行われる予定であったが、コロナの影響で中止となったため今回の対象から除外している。

(2) アンケート調査

コロナ禍における実習指導の在り方としてアンケート調査を行った。内容は、実習前の質問項目として「問1. 新型コロナウイルス感染症への対応としてあなたが行ってたことはありますか?」、「問2. 新型コロナウイルス感染症が収まらない中での実習となりましたが、その中で何か不安なこと・心配なこと等ありましたか?」を設定した。それぞれに対して「あった・なかった」を選択してもらい、「あった」場合には自由記述として具体的な回答を求めた。

実習中の質問項目として「問3. 実習先の園・施設では、新型コロナウイルス感染症への対応としてどのようなことを行ってましたか?」を尋ね、「①子どもや利用者・保護者に対して等」、「②実習生に対して」それぞれ、自由記述として具体的な回答を求めた。更に、「問4. 実習中にあなたが、新型コロナウイルス感染症への対応として行ってたことはありますか?」を設定し、それぞれに対して「あった・なかった」を選択してもらい、「あ

った」場合には自由記述として具体的な回答を求めた。

実習後の質問項目として「問5. 今年は、例年とは異なる実習指導体制及び実習となりましたが、短大卒業後保育者として働くにあたって何か心配なこと等がありますか?」を設定し、それぞれに対して「ある・ない」を選択してもらい、「ある」場合には自由記述として具体的な回答を求めた。

(3) 保育者養成校におけるコロナ禍の保育実習・実習指導の課題

2021年度全国保育士養成セミナーに参加し、コロナ禍での実習及び実習指導、授業に関する分科会等に参加し、以下の改善案を考察した。

①実習施設と養成校との情報交換の場

「プラスワンセミナー②実習指導の質的向上にかかる保育実践の場と養成校との協働的な取り組みについて—新たなるローカルスタンダードの展開（施設編）」では、実習先施設と養成校での実習指導をどう協働していくことがよいのか具体例を挙げながら検討が行われた。その中でコロナ禍における短縮実習の実施例からの報告があったのだが、報告された短期大学においても5日間の短縮実習と代替演習に切り替え実施したのことであった。コロナ禍において実習先施設も利用者の安全等にも十分に配慮しながら日々の支援を行っている。その中で学生を実習先に行かせることへのジレンマを実習施設も養成校も感じながらの実習であった。そうしたジレンマは学生にも共有し、より相手の立場に立って物事を考える機会にしてほしいと指導したとのことであった。また、実習施設での実習内容についても感染予防を優先しつつ利用者等へのかかわりを重視しながらも職員講話も含む内容にすることを実習施設と確認していた。そうした中で、学内での演習ではなく、実習施設での実習であるためできるだけロールプレイ等事例を取り入れた講話にしてほしいという希望を実習施設にも伝えたとのことであった。これらの調整は資料を基に実習先施設と個別に行ってきたということであったが、今後は懇談会のような

形で養成校と実習施設との情報共有だけでなく同種別の施設ごとの具体的な情報交換等の場を作ることの必要性が課題としてあがっていた。

本学でも、2020年度の保育実習Ⅰ（施設）は短縮実習と学内演習という形で実施され、報告のあった短期大学と同様に学生への負担（健康観察や行動記録の実施、コロナへの感染の心配をしつつ実習施設へ行かせること、実習施設での感染予防のための対応等）をかけること、実習施設の利用者の安全対策に影響を及ぼすのではないかというジレンマを抱えながらの実施であった。そうした中で、短縮であっても施設に実際に行けたことは学生にとっては大きな学びであったことは、実習後の報告発表でも感じられた。そうした中で感じたことは、実習施設と養成校の信頼関係の構築の重要性である。今回の報告でもあったように、養成校から学生の状況を踏まえたうえでの実習内容に関する希望を伝えることも必要であると考えられる。実習訪問に行った際に学生の状況や実習指導の状況は伝えるようにはしているが、こうした情報交換の場を作ることも実習施設と養成校とが協働して保育者養成をしていくためには必要であると改めて考えた。

3. 研究倫理への配慮

学校法人小池学園研究倫理規定に基づき、調査・研究については、個人情報保護するとともに、情報漏洩の防止に十分に配慮し、個人及び園・施設が特定されることの内容に配慮した。また、学校法人小池学園研究倫理公正委員会の倫理審査の承認を受けた。

アンケート調査にあたっては、小池学園研究倫理規定に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究調査の主旨、調査データの扱いや個人情報の保護について書面と口頭で説明し、同意の得られた場合に質問紙への回答を依頼した。調査内容については、個人情報保護するとともに、情報漏洩の防止に十分に配慮し、個人が特定されないように配慮した。

4. 結果

(1) アンケート結果

アンケート調査の結果は以下のとおりである。

「問1. 新型コロナウイルス感染症への対応としてあなたが行っていたことはありますか？」の問いに対して、58名すべての学生が「あった」と回答した（図1）。その対応の多くは、「マスクをつける」、「手を洗う」、「うがいをする」、「消毒を行う」であった。そのほか、「検温を行う」、「外出を控える」、「人込みを避ける」などが挙げられた。



図1：「問1. 新型コロナウイルス感染症への対応としてあなたが行っていたことはありますか？」

「問2. 新型コロナウイルス感染症が収まらない中での実習となりましたが、その中で何か不安なこと・心配なこと等ありましたか？」に対して、約半数の学生が「あった」と回答した（図2）。「あった」と回答した学生の不安理由は、「自分が罹患することへの不安」、「自分が感染源となり子どもや保育者にうつしてしまうのではないかという不安」、「実習直前または実習中に実習自体が中止になってしまうのではないかという不安」、この状況下で子どもや利用者に対してどこまで関わればよいのかという「援助や関わりに対する不安」がほとんどであった。

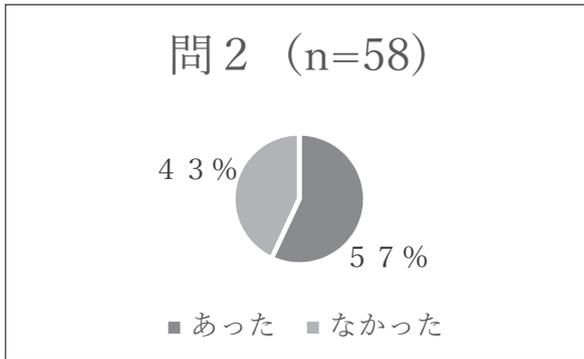


図2：「問2. 新型コロナウイルス感染症が収まらない中での実習となりましたが、その中で何か不安なこと・心配なこと等はありませんでしたか？」

「問3. 実習先の園・施設では、新型コロナウイルス感染症への対応としてどのようなことを行っていましたか？」という質問に対して、「①子どもや利用者・保護者に対して等」の自由記述の回答は、「マスクをつける（フェイスシールドを含む）」、「手を洗う」、「うがいをする」、「消毒（子どもや利用者・保護者に対して、おもちゃや机などに対して両方）」、「検温を行う」であった。そのほか、「環境構成の工夫」、例えば換気を行う、衝立（アクリル板）を設置する、机の間隔を十分にとるなどが挙げられた。「②実習生に対して」は①同様、「マスクをつける」、「手を洗う」、「うがいをする」、「消毒（子どもや利用者・保護者に対して、おもちゃや机などに対して両方）」、「検温を行う」といった回答が多かった（図表なし）。

「問4. 実習中にあなたが、新型コロナウイルス感染症への対応として行っていたことはありますか？」の設問に対しては、ほぼ全員が「あった」と回答した（図4）。その回答の多くは、「マスクをつける」、「手を洗う」、「うがいをする」、「消毒を行う」であった。そのほか「検温を行う」、「外出を控える」、「人込みを避ける」など、問1の自由記述とほぼ似たような意見が挙がった。

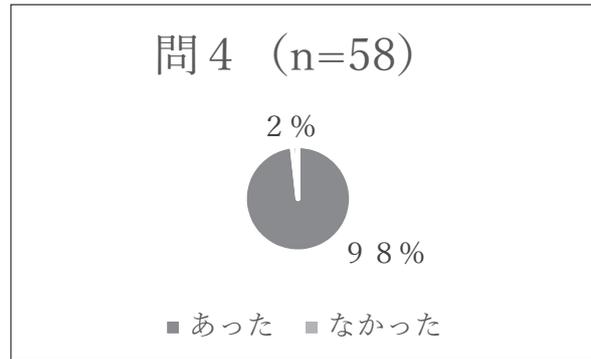


図3：「問4. 実習中にあなたが、新型コロナウイルス感染症への対応として行っていたことはありますか？」

「問5. 今年は、例年とは異なる実習指導体制及び実習となりましたが、短大卒業後保育者として働くにあたって何か心配なこと等がありますか？」の設問については、回答者の約3分の1が「ある」と回答した（図4）。自由記述については、「自身が新型コロナウイルスに罹患した場合や職場でクラスターなどが発生した時にうまく対応できるか」、「マスクをずっとしている子どもたちの顔を覚えることができるか」といった、コロナ禍ならではの回答もみられる一方、「保育者としてやっていけるのか」、「保育者としての実力や知識が備わっているのか」など、保育者として働くこと自体への不安に関する自由記述もあった。

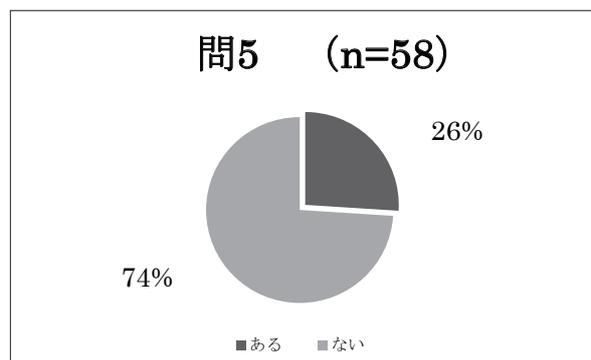


図4：「問5. 今年は、例年とは異なる実習指導体制及び実習となりましたが、短大卒業後保育者として働くにあたって何か心配なこと等がありますか？」

(2) 保育者養成校におけるコロナ禍の保育実習・実習指導の課題

8割を超す保育者養成校が実施したことが「臨時の実習先との交渉・協議」、「コロナ禍対策のガ

イドライン類の整備」であった。その中で実習先から求められたコロナ禍対応として、健康管理表作成、イベントへの参加禁止や県内滞在、アルバイトの禁止（いずれも実習2週間前）がある。特に施設実習は、他の実習よりもPCR検査や通所実習への変更が多く、養成校であった。

実習指導についても、COVID-19の拡大による保育者養成校教育の変化として、遠隔授業を新しい教育方式として取り入れたことが挙げられる。どの養成校も最初は手探りで実施していたと思われるが、遠隔授業にはメリットとデメリットが混在する。

メリットとしては、時間をかけて課題に取り組めることから、個々の学びが深まる。

デメリットとしては、演習・実習などの体験型の学びが困難なため、具体的なイメージができない。また、オンデマンド型や双方向型（一方向性の程度が高い）の要素が強いため、アクティブ・ラーニングの要素が薄い、といったことが挙げられる。

5. 考察

実習前の学生たちの新型コロナウイルス感染症に対する対策は全員行っていることが分かった。感染対策方法に関しても、「マスクをつける」、「手を洗う」、「うがいをする」、「消毒」、「検温を行う」、「外出を控える」、「人込みを避ける」について多くの回答があった。この感染対策については本学でも授業内や学務課から感染対策の注意喚起を常々行っていたこともあるが、おそらくテレビやSNS等を中心に社会全体が新型コロナウイルス感染症対策の情報を毎日のように発信していた影響も大きく、学生たちも日頃から感染対策意識を高くもち、その行動を行っていたと考えられる。そのことに加え、登校の際、毎日、検温の記入を求められていること、実習指導授業内で、実習2週間前からの検温チェックと、健康観察表にその記入について指導があったこともこの結果に繋がっていると考えることが出来る。このことに

関しては実習中も学生の意識は、変わることなく継続されていることが、「問4」の回答からも伺える。

また学生は、コロナ禍での実習を前にして、様々な不安や葛藤の中で過ごしていたことが明らかになった。その内容も自分自身、新型コロナウイルス感染症に「罹患してしまう不安」を感じていたという事実もさることながら自分自身が罹患し、感染源として子どもたちや保育者にうつしてしまうのではないかと「実習先へ迷惑をかけてしまう不安や葛藤」を感じていることが分かった。例年であれば、「責任実習をうまくできるか」、「指導案はしっかりと立てることが出来るのか」など責任実習自体に対する不安がこの時期は多いが、そういった例年のような不安や悩みを自由記述に回答する学生はほとんどいなかった。

このような結果にはなったが、例年同様の不安や悩みが全くなかった訳ではない。その不安に加えて、新型コロナウイルス感染症に関する不安等があったこと、そしてその新型コロナウイルス感染症に関する悩みが学生にとっては非常に重く感じていたことが「問2」の回答から伺えるのではないだろうか。

実習中に関しては、この状況下での保育所や施設での対策をしっかりと観察してきたことが伺える。特に保育所で実習を行ってきた学生は、自分自身が行っているコロナ感染対策に加え、よりきめ細かく留意された保育所側の対策について、体験を通して学んできたことが自由記述から読み取れる。例えば、保護者との対応に関しては園舎中ではなく玄関やテラスなどで対応を行うといった登降園時の工夫を行っていたこと。他にも、衝立（アクリル板）を立てたり、机を互い違いにし間隔を十分にとったり、換気を常に行うなど、環境構成の工夫など実地から学んできたことである。

実習後、保育者として働くにあたっての心配や不安に関する設問については、全体の約3分の1（17名）が何らかの心配や不安を感じているといった結果になった。その自由記述に着目すると、17名中、新型コロナウイルス感染症に関連する

と思われる不安や心配を記述している学生が7名であったのに対して、そもそも働くこと自体への不安などを感じている学生が10名であった。その10名の自由記述の内容は、結果でも述べたように「保育者としてやっていけるのか」、「保育者としての実力や知識が備わっているのか」などであった。こちらの回答に関して、本学の場合においては新型コロナウイルス感染症に関連すると思われる不安等よりも、毎年学生たちがこの時期に感じている不安の方が若干多いことが分かった。

6. 総合考察

今回の調査では、本学学生が実習や実習指導に関して、新型コロナウイルス感染症に関する対策を十分に講じ、実習に臨んでいたことが分かった。一方で、新型コロナウイルス感染症に関連する不安や悩みを常々感じながらの実習となった。責任実習と言え、ただでさえ学生は強い不安や悩みを覚えるものであるが、そのことに輪をかけてコロナ禍の不安が学生を覆いつくしていることも明らかになった。このことに関して、私たち教員もその事実をしっかりと受け止め、その上でその気持ちに寄り添いながら実習指導を行う必要がある。また、こういった状況下の保育現場等での対策や様子を知ることも重要である。そのことを実習指導内で伝えることで、学生たちの不安が少しでも和らぐことに繋がると考えられる。また、現場の保育者などにも学生の様子、特に不安なことや悩みについて共有をすることで、そのことを踏まえただで指導にあたっただけであろう。

このままの状況が続くようであれば次年度以降も、コロナ禍での実習指導及び実習は避けられないと考える。今回得た本学における学生の考えや不安などの知見を参考に、次年度の保育実習指導及び保育実習に役立てていきたい。

また、今回は2020年度1年生に関して調査を行っていない。理由として、1年生の保育所での保育実習がコロナ禍の影響で中止になってしまっ

たことが挙げられる。1年生は実習に行くことが出来なかったという2年生とは違った不安やコロナ禍での悩みがあることは想像できる。1年生に関しても今後調査を行っていききたい。また、本学教員がコロナ禍の中でどう実習指導にあたり、何を感じていたのかも併せて調査を行うことで、より一層、コロナ禍においての実習指導についての知見や方策を得ることが出来ると考える。

※本論は、日本保育学会第74回大会におけるポスター発表に加筆したものである。

(参考文献)

- 1：一般社団法人全国保育士養成協議会（2018）『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2 「協働」する保育士養成』，中法法規出版
- 2：奥恵、浅香勉、八田清果、音田忠男（2020）「保育実習生の課題を踏まえた実習指導のあり方」，学校法人小池学園『研究紀要』第18号
- 3：八田清果、奥恵、浅香勉、音田忠男（2020）保育者養成校の学生の傾向・課題から検討する実習指導の在り方について—A保育者養成校における保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲの実習先評価の経年比較から—
- 4：厚生労働省「保育所保育指針」フレーベル館、2017

音田忠男（埼玉東萌短期大学専任講師）

八田清果（埼玉東萌短期大学准教授）

真砂雄一（埼玉東萌短期大学准教授）

奥 恵（埼玉東萌短期大学専任講師）